中華人民共和国出土文物展

中華人民共和国出土文物展図録

要点解説　(50音順)
北 村 哲 郎(東京国立博物館染織室長)
鈴 木 博 司(京都国立博物館考古室長)
関 野　　雄(東京大学教授)
長谷部楽爾(東京国立博物館東洋課東洋美術室長)
林　己奈夫(京都大学人文科学研究所助教授)
藤 田 国 雄(東京国立博物館東洋課長)
米 沢 嘉 圃(東京大学名誉教授)
編集
藤 田 国 雄(東京国立博物館東洋課長)
桑 原 住 雄(朝日新聞東京本社企画部美術担当)

発　　行—朝日新聞東京本社企画部
〒100 東京都千代田区有楽町2丁目3番地
デ ザ イ ン—美術出版デザインセンター
原色版印刷—株式会社光村原色版印刷所
印刷・製本—凸版印刷株式会社

©ASAHI ・1973

中華人民共和国出土文物展

ARCHAEOLOGICAL TREASURES EXCAVATED IN THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA

●東京展：1973年6月9日(土)—7月29日(日)　東京国立博物館
●京都展：1973年8月11日(土)—9月30日(日)　京都国立博物館

〔主催〕東京国立博物館・京都国立博物館・日本中国文化交流協会・朝日新聞社
〔後援〕外務省・文部省・文化庁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あいさつ

日中国交正常化を記念する「中華人民共和国出土文物展」が，中華人民共和国の全面的な協力によって実現のはこびにいたったことは，まことによろこばしいことであります。

日本と中国との交流は，二千年以上の歴史を持っております。その間，わが国の文化はたえず中国文化の影響のもとに発展してきました。このたびの展覧会には，中国側の配慮により，春秋時代から漢，隋，唐をへて元時代にいたる間の236点が出品されますが，これらの文物はとくに日本との交流がはじまった漢時代から，それがもっとも盛んだった唐時代に重点をおいて構成されています。

この展覧会には，二千年の両国間の密接な歴史を再確認するとともに，これを将来の友好と相互理解への新しい出発点にしたいという念願がこめられており，日中国交正常化を祝う行事としてまことにふさわしいものと考えます。

おわりに本展開催のためにご協力下さいました各方面の方々に対して，心からお礼申上げます。

1973年6月

東京国立博物館
京都国立博物館
日本中国文化交流協会
朝日新聞社

祝　　辞

「中華人民共和国出土文物展」が日本と中国の国交正常化を記念する事業の一つとして日本で開催されますことは、まことに有意義であります。

そもそも一衣帯水の隣国同志である両国は、二千年余りの昔から交流を深めてまいりました。特に中国のすぐれた文化は、わが国に対して絶えず大きな影響を与えつづけてきました。この長い交流の歴史をふり返り、かつ今後の深い友好のきずなの出発点ともなるべきこの展覧会開催の意義には、ひとしお重要なものがあると確信します

昨年秋、北京訪問のさい、私は、毛沢東主席から楚辞集注をいただきました。このたびの出土文物展には、楚辞にちなんで、特に楚国の墓から出土した越王勾践の剣が出品されると聞いております。中国政府の並々ならぬご配慮とご好意に対して、心から敬意を表します。

この画期的な中華人民共和国出土文物展の開催を衷心からお祝い申上げるとともに、今後の日中間の友好の一層の発展と増進を切に念願いたします。

1973年6月

内閣総理大臣　田　中　角　栄

中日両国人民の末長き友情

中日国交正常化を記念するために、日中文化交流協会等が主催する「中華人民共和国出土文物展」が開催されることは、中日両国人民の文化交流の上で祝賀に値する喜ばしい事で、心からご成功をお祈り致します。

この度、日本で展示される中国の出土文物は、中国の考古工作者及び広汎な労農兵大衆が毛沢東思想に導かれて、文化遺跡と古墓から発掘した成果の一部で、そのほとんどは中国のプロレタリア文化大革命の期間中に発掘されたものです。これらの貴重な文物は、中華民族の祖先が長期にわたる勤勉な労働を通じて創造した輝かしい古代文化を反映しており、人類歴史の研究のために重要な実物資料を提供してくれました。

展示品は、また中日両国の往来と文化交流が悠久の歴史を有することを雄弁に物語っています。唐長安城の範囲、内部設計と日本の古都——藤原京、平城京、平安京の設計、布局ならびに乾県唐懿徳太子墓の壁画と日本高松塚侍女群壁画とはみな非常に似ています。特に長安の出土品で、日本の使者が中国へ持って行った古銭“和同開珎”は、中日両国人民の末長き友情を表わしています。

この度の展覧会は、中日両国人民の伝統的友情と文化交流に新しい光彩を添えるであろうと、私は深く信じて疑いません。

1973年6月

中華人民共和国駐日本国特命全権大使　　陳　楚

中日两国人民的友谊源远流长

日中文化交流协会等单位，为纪念中日邦交正常化而举办的“中华人民共和国出土文物展”今天开幕。这是中日两国人民文化交流上一件值得庆贺的喜事。我衷心地祝贺展出成功。

这次来日本展出的中国文物，是中国考古工作者和广大工农兵群众，在毛泽东思想指引下，从文化遗址和古墓中发掘出来的一部分成果。其中绝大多数是在中国无产阶级文化大革命期间出土的。这些珍贵文物生动地反映了中华民族的祖先在长期辛勤劳动中创造出来的灿烂的古代文化。它为研究人类历史提供了重要的实物资料。

在展品中还令人信服地证明，中日两国的往来和文化交流，有着悠久的历史。唐朝长安城的范围、内部规划与日本古代都城——藤原京、平城京、平安京的设计和布局；乾县唐懿德太子墓的壁画与日本高松塚侍女群壁画，都是十分相似的。特别是从长安出土的日本使者带到中国去的日本古钱“和同开珎”，更能说明中日两国人民的友谊源远流长。

我深信，通过这次展出，一定会为中日两国人民的传统友谊和文化交流增添新的光彩。

1973年6月

中华人民共和国驻日本国特命全权大使　陈　楚

出土文物展に寄せて

越王勾踐の呉を破る劍
專ら民工に賴って字は錯金とす
銀縷の玉衣いままた是れあり
千秋朽ちず匠人の心

中國の出土文物の展覧に計二百三十六件を出品す。その中に越王勾踐の自作の用劍および東漢の銀縷の玉衣あり。劍は『自作』と銘するも，實は民工に賴るものなり。衣は王の軀に被せられ，匠の手に裁成されしものなり。歴史を創造する者は英雄帝王に非ず，すなわち是れ人民工匠なり。

1973年4月11日

郭　沫　若

越王句踐破吳劍，專賴民工字諧金。

銀絲玉衣金人是，千秋不朽匠人心。

中國出土文物展覽，計出土二百三十六件，

其中有越王句踐自作用劍及金絲銀絲

玉衣。劍銘「自作」，實賴民工，玉被之能

成器匠手。創造歷史者，無數英雄帝王，

乃是人民工匠。

一九七三年冬月十一日 郭沫若

出品文物展の全体像

王 冶 秋

新中国成立以来，考古学関係の発掘調査は非常に大きな成果を収めたが，プロレタリア文化大革命の期間にはいっそう多くの，貴重な発見があった。わたくしたちは，この数多くの発掘調査のなかから15グループの発掘成果のうちの重要文物計213点を選び，それに模作，模写，補助展示品23点を加えて今回の展覧会を構成した。

科学的に発掘された重要な古代文物を中国以外の場所で，しかも数カ所にわたるものを展示するということは今回が初めてである。

15グループの展示項目は，漢と唐の両時代が主になっている。

蔡侯墓と楚墓

安徽省寿県の蔡侯墓と湖北省江陵の楚墓が展示の序幕である。紀元前491年から，紀元前447年，楚が蔡を亡ぼすまで，蔡の都城は今の寿県一帯にあった。そこで寿県の蔡侯墓の絶対年代は，この45年の間ということになる。この蔡侯墓はこれまで考古学的発掘によって知られている春秋時代の墓葬としては最大のものである。青銅の礼楽器多数が墓室の北半部に置かれていたが，その数も多く，しかも形が大きく，器形の種類も完全にそろっていた。さらに重要なことは，その多くの楽器に，長文の韻をふんだ銘文が鋳込まれていることである。展示された銅盤と銅尊の銘文は同じもので，この2つの青銅器は呉王のもとに嫁ぐ蔡侯の姉「大孟姬嬇」のために作ったものであることがしるされている。おそらく，呉の国が亡びてしまったので青銅器は送られずじまいとなり，のちに蔡侯が自分の副葬品にしたのであろう。

もう一つの「呉王光鑑」の銘文には「呉王光擇其吉金……台乍叔姬寺吁宗𨺅（彝）荐鑑」（呉王光は叔姬寺吁，宗𨺅への送りものとしてこの銅器をえらぶ）と書かれているので，呉王光が娘の「叔姬寺吁」を蔡に嫁がせるときの嫁入り道具としたことがわかる。呉王光は，越王勾践をうちまかした呉王夫差の父親の闔廬である。越王勾践が敗れたあと，いわゆる「臥薪嘗胆」して最後に呉の国を亡ぼした物語は，わが国の歴史に有名であり，日本の人人もよく知っている。

ここには，きわめて貴重な勾践の宝剣が展示されている。剣身は一面菱文で飾られ，目をうばうばかりに輝やいている。剣の柄の両面に，藍色の琉璃と孔雀石が象眼されており，柄の近くの片面に「越王鳩浅（勾践）自作用剣）の8字が鳥篆書体で刻まれ，剣の刃はいまもなお非常に鋭利である。「越絶書」には勾践が5振りの宝を持ったとあるが，この精巧につくられた青銅剣は，そのなかの一つかも知れない。この剣は湖北省江陵の望山の楚墓から発現されたものであるが，越王勾践が自ら作り使用した剣がなぜ楚の墓から出たのだろうか。それは，紀元前334年，楚が越を亡ぼしたときに楚の国が奪い取った戦利品だと推測する人がいる。この墓の規模はそれほど大きくないが，勾践の宝剣のほかにも彩絵した漆器や精巧な青銅器，竹を彩色して編んだ花ござなど精巧なつくりの器物が数多く出土している。透かしぼりに彩漆した精緻をきわめた木製の「座屏」（屏風）は，長さが52センチ足らず，高さがわずか15センチのものであるが，そこに，鳳（おおとり），鹿，蛙，蛇など大小49の動物を生き生きと彫り出している。残念なことにこの「座屏」は脱水をおこなっていないので，ここではその複製を展示することになった。この墓からはまた，楚の王の名をしるした竹簡がいくつか出土したが，展示された5枚の竹簡残欠には「口王干茂郢」や「郤固貞」などの字がみられる。江陵の望山は，当時楚の国の都，郢都の近くにあって，戦国時代の楚の文化を代表する地点であり，楚辞の主な作者であり有名な詩人である屈原がここに暮したこともある。したがって，勾践の宝剣や高度の技術をしめした各種工芸品がここの楚墓から現われたことも偶然ではない。

長沙の馬王堆

2100年前の軑侯利倉の家族の墓葬，すなわち，湖南省長沙の馬王堆一号墓から出土したものは最も重要な展示の1つである。その中心になるものは，最も保存しにくいにもかかわらず完全な形で残っていた各種の染織品である。蟬の羽のようにうすい白紗の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひとえ，対鳥菱紋綺(あやぎぬ)，香袋に使われている薄ものに模様織りした「羅綺」,それに「起絨錦」(輪奈織),これらは当時の非常に高度な絹織物の技術をしめしている。「起絨錦」ができるということは，織機に模様織りの装置が必要であるばかりか，さらに一定の技術水準をもつ起絨圏（毛経）の設備をとりつけなければならないということをしめしており，2000年あまり前に，このように複雑な紋織機がつくられたということは，驚くべきことである。染織品の加工の面でも，同じように予想を大きくうわまわるものがある。彩色豊かな，またひきしまった独自の構図をもつ各種の刺繍品，いまなお非常に強い麻布の織物，捺染彩色した多くの染物など，いずれも想像もつかないほど高い技術をしめした紡績加工品である。ここに展示されている綿入れの袍は，すそが真すぐで右前になっており，着丈が1.32メートル，ゆきが2.28メートルある。表の黄紗の地に一面こまやかで整然とした捺染と彩絵の図案がほどこされているが，その図案は蔓草を模様化したものである。図案を分析してみた結果，その工程がつぎのような順序だとわかった。つまり，(1)版木にほり，黄褐色で蔓の枝をそめだす。(2)うす藍色でつぼみを描く。(3)さらに濃い藍色で葉を描く。(4)黒い色で点のかざりをいれる。(5)朱の色で花穂を描く。(6)最後に白色で点と鈎型のかざりをほどこす。このように加工した図案は，顔料ののりが散るという弊害がないばかりか，図案が重なったり平均しないといった現象がおこらない。しかし，こうした捺染方法はあきらかに大量の人手を浪費しなければならないので，これは当時最も高貴な服の１つだったにちがいない。これは、文献に記載されている「皇后の上服（外で着る服)」のたぐいの「画衣」に属すると推測する人がいるが，うなずけることである。

天上と在世，それに墓主の姿を描いている有名な彩絵帛画は，長さが2.05メートルある。人物は生き生きと描かれ，その線はのびやかで美しく，彩色は平ぬりを主としながらも，ところによっては渲染（ぼかし）法もみられる。これは，非常に貴重な芸術作品だといえよう。墓の中でこの帛画が置かれていた墓中の位置は，前にのべた「袍」のように良い条件になかったために，部分的にすでに炭化しており，持ち運びすることは困難である。それ故，ここにはその模作が展示されている。

この帛画とその美を競っているのが二つの大きな漆絵棺で，黒漆の棺に数多くの神仙，妖怪の物語りが彩漆で描かれており，朱漆の棺には，たがいにまつわりつく龍と虎がえがきだされている。会場にはそのいくつかの部分のカラー写真が展示されている。漆棺の外側の箱からは大量の漆器が出土したが，その種類の多いこと，保存の良いことなど，いずれの点でもまれにみるものである。鼎・壺のように大きいものは脱水処理が容易でないので，わたしたちは完全に脱水した小さい耳杯，盤，勺などをえらんだにすぎない。これらはみな，木胎で，内側に朱漆，外側に黒漆を塗っている。文様はのびやかで，その線は時計のひげぜんまいのような細さである。脱水処理をおこなったあともその色や光沢はいぜんとしてきわめてあでやかである。このほか，稲，梨，なつめ，梅，豆豉薑（調味料),それに，にわとり，しゃこ，犬の骨の入った「熬鶏笥」(煮もの用竹製行李)など食物の一部も展示されている。

長江（揚子江）以南

馬王堆一号墓の発見によって，長江中流地域の前漢時期における経済，文化などについての新しい知識を得ることができた。これらの文物についてみると，戦国時代以降，この地域は楚の文化を基礎にさらに急速な発展をとげているが，「漢書」の「江南の地は原始的な耕作をしている」という記載によって，広大な南方の社会経済が当時すべてまだ非常におくれた段階にあったと考えるのはあきらかに事実に合致していない。

実際には，長江以南の多くの地区は秦漢の統一によって，生産が急速に発展し，文化がしだいに高まっただけではなく，もっと南の嶺南地方でも，前漢の時期に一部の地区の社会経済が相当高い水準に到達している。

広西壮族自治区の合浦で発見された前漢後期の木槨墓は，重要な具体的資料をもたらしてくれた。この墓は長さが24.6メートル

あり槨室は豪華で内壁は漆で飾られ，金箔をはった銅具が飾られていた。木棺の両側に多数の青銅器や漆器が置かれ，左右の側室には陶器，青銅器，車馬具が置かれていた。わたくしたちは，青銅器のなかから，地方色のよくでている銅屋，鳥形銅燈，三足銅盤，それに提梁銅壺各1点をえらんで展示したが，あとの3点は造形が精巧なだけでなく，さまざまな精細な文飾が全体に鋳こまれている。

石寨山の青銅文化

谷浦よりいっそう辺鄙なところにある雲南省晋寧の石寨山で高度に発展した青銅文化が発見された。ここは墓群をなしており，金の蛇紐の「滇王印」が出土したことから，この一群の墓が紀元前1世紀の滇王の家族の墓葬であることがわかった。当時漢の武帝がすでに雲南地方に益州郡を設置していたものの，滇池一帯の少数民族はまだ奴隷制の社会形態をかなり色濃く維持していた。墓群から出土した各種の生産用具，武器，生活用具はすべて青銅でつくられている。青銅器の多くには動物の装飾が鋳こまれ，なかでも，牛の形象がもっとも多い。このことは疑いもなく牛が当時この地の経済生活のなかで重要な地位を占めていたことをしめしている。

青銅器のなかでももっとも注目されるのは，その形が銅鼓に似た貯貝器である。貯貝器の表面やまわりに，生産や祭り，貢物の納めるところなどさまざまな場面が，つけられたり彫りこまれたりしている。こうした場面では奴隷主をとくに大きくしており，金が塗ってある。展示されている四牛貯貝器の上部中央の鍍金された騎士がつまり奴隷主である。もう1つ，「貢納」貯貝器の上には17人の人物が鋳こまれている。前を歩いているのは中年の男子と年老いた男子で腰に長刀をさげているから，これは奴隷主の部下にちがいない。うしろについてゆくのは，食物をいっぱいつめた底の深い籠を背負った人，牛馬をひく人，何か物をかついでいる人であり，いちばんうしろは護送人である。こうした真に迫まる形をもつ，内容の複雑な貯貝器は、中国西南地方の少数民族の歴史に，得がたい資料を加えたのである。

徐州漢墓の銀縷玉衣

初めて発見された銀縷玉衣（ぎんるぎょくい）は，最も重要な展示物で漢代の文物である。それは今の江蘇省徐州市の後漢中後期の塼室墓から発見された。この墓は，彭城王劉恭の家族の墓葬と推測される。玉衣は発見時すでに散乱していたのだが，その置かれていた位置にもとづいて整理し，完全な形に修復した。玉衣は全長1.7メートル，あわせて2,600個あまりの玉片を用い，それをつづった銀糸は重さ約800グラムである。頭のおおい，顔にかぶせるおおい，左右の袖，左右の手袋，胸部，背なか，左右のズボンそれに左右の靴と12の部分で玉衣は構成されている。それぞれの部分に使われた玉片の規格は同じであるばかりでなく，胸部と背なかの玉片は比較的大きく，手袋の玉片は比較的小さい。袖とズボンの玉片を比較すると，袖の玉片がやや細長い。玉片は長方形のものが多いが，正方形，三角形のものもあれば，形の不規則なものもある。不規則な形のものは必要に応じて特別につくられたもので，たとえば，眼のところには，楕円形の玉片を，下顎部には半月形の玉片を配しており，親指には，上がとがり下が四角の玉片が使われている。玉片の形が規則的でありながら多様性をもっているのは，当時の製作者が玉衣を設計する際に綿密に考えぬいたことをしめしている。袖とズボンの玉片には「第五」「第九」などと墨で番号が入れてあるが，この番号は二つの部分の玉片の配列の順序をしるしたものであり，玉片をみがきあげたあとで書きこんだものにちがいない。それらは1,800年前の職人の手から生まれたものであって，封建貴族の死体がとっくの昔に泥土と化しているのに，製作した職人の手のあとが長期間，生き生きと残っているということはたいへん貴重である。この玉衣とともに青銅器や釉陶器が数多く出ているが，そのうち，展示された文飾の華麗な金象嵌銅箙の工芸水準が最高である。

霊宝漢墓の六博俑

徐州の後漢墓よりややあとの河南省霊宝漢墓の副葬品のなかで，

比較的珍らしいのは一組の緑釉六博俑である。二つの人形が向いあい，すごろくを前にたがいに譲りあっているようにみえる。二つの人形の間に六枚の竹のふだとすごろくの盤が置かれ，その上に両方とも駒が六つ並んでいる。この遊戯はおそらく隋唐の時期に流行した「双陸」（すごろく）と一定の継承関係があるにちがいない。

象山と張盛墓の磁器

魏，晋，南北朝，隋時代は，中国の磁器づくりが成熟期に入る時代である。南方の青磁は素地が堅く，釉にうるおいがあるばかりでなく，さまざまな生き生きとした造形をつくり，鉄質のもので褐色斑点のととのった装飾を焼きだしている。江蘇省南京の象山七号墓の青磁器は，南方のこの段階の早期における代表作である。

北方ではこの段階の後期に，河南省安陽地区に青色の光をもつ初期の白磁が現われた。595年の張盛墓で発見されたいくつかの白磁，とりわけ，黒釉で装飾した大型の白磁侍吏俑は，当時の白磁の頂点をしめす作品である。これらの白磁のうち，もう一つおもしろい器物は，精巧につくられた囲碁盤の模型である。この盤面は縦横19条で，日本の正倉院のこれより100年あまりあとに作られた「螺鈿棋局」と同じ用い方のものである。

唐の長安

唐代の展示品目はすべて，当時の都・長安とその付近で発見されたものばかりである。唐代は，日本とのあいだに盛んな往来があったので，昔から唐の長安は日本人によく知られてきた。唐の長安の範囲とその内部の区画は，長年の調査と発掘によってすでにほぼ明らかとなっている。四角形に近い総平面と，宮城が北にあり，南に市場が並ぶ情況はすべて確証された。日本の古代の都・藤原京から平城京，それに平安京にいたる都の設計はみな，明らかに長安の配置と密接なつながりをもっている。西市，興化坊，興慶宮，それに城北の大明宮が唐長安の考古学活動の重点である。大明宮は，七世紀中葉以后，唐の宮廷の所在地で，そのうちの二つの最大の宮殿である含元殿と麟徳殿については，綿密に発掘を行ったばかりでなく，復元の研究もすすめた。含元殿は大明宮の主殿で663年に建てられ，謁見の儀式の行われた場所である。柱の基礎の並び方からみて，この殿舎の間口が11間，奥行きが，たるき八本分で，面積はほぼ2,000平方メートル近くあり，内部の柱と柱の間が10メートル近くある。殿舎の外にはまた廊下をめぐらし，その規模は大きく雄大である。わたくしたちは，遺跡の情況にもとづき，また，日本に現存する飛鳥，奈良時代の建築をふくむ関係資料や文献の記録を参考にして復元図をえがきあげた。麟徳殿は含元殿の西にあり，前，中，後の三つの部分にわかれていて，南北130メートル，東西77.55メートルの台基の上に建築されている。そこは，皇帝が外国の使者に接見，宴会を行なう場所であった。

この二つの宮殿の遺跡から蓮花文の方塼や瓦当が多数出土したが，これら建築部材と日本のほぼ同じ時期の建築部材とが，驚くほどよく似ており，なかにはほとんどそっくりのものもある。大明宮前の東側の大安国寺の遺跡から，精巧に彫刻し，金箔をはって彩色をほどこした白大理石の仏像がいくつか出土したが，それはほとんど破砕されている。それは会昌の廃仏によるものとおもわれる。展示された不動明王像は，密教の守護尊で，権力をうちやぶる法力をもつといわれた。759年，鑑真和上が奈良に唐招提寺をつくったとき，弟子の義静が，不動明王を祭る「不動堂」を特別に設けている。

長安の興化坊の遺址の地下の倉庫から金銀の器物が数多く発見された。展示されている狩猟文高足銀杯と提梁銀罐に出猟や鸚鵡の文様がみられるが，これは盛唐の時期に流行した文様で，日本に伝わる盛唐文物の文様のなかに，これに類似するものを容易にみいだすことができる。展示されている鍍金銀器は，唐代中期になってからのものとおもわれるが，文様の構図がそれ以前の比較的複雑なものが改められており，のびやかな明るい作風が現われている。窖蔵にはこのほかに日本の元明天皇の和銅元年（708）

に鋳造された銀銭「和同開珎」が五枚保存されていた。これは，奈良時代の日本の文物が中国で発見された最初のものであって，おそらく当時，日本の遣唐使が長安に持ってきたものであろう。

章懐太子と懿徳太子

西安市の西北にある乾県は，唐の高宗李治と則天武后が合葬されている乾陵の所在地である。陪葬墓は陵の南側に分布しており，これまでに発掘された最大の陪葬墓は706年につくられた章懐太子（高宗の次子）の墓と懿徳太子李重潤（中宗の長子）の墓である。この二つの墓は早く盗掘され，荒されていたが，それでもまだ精緻な線刻の石槨や彩色壁画，生き生きとした三彩俑などが残っていた。章懐太子の墓道の両壁には，球を打つ光景と出猟のさまが描かれており，いずれもその長さは10メートルをこえる。ここに展示してあるのは主な部分の模写である。この原画は，力強い線で描かれており，人物が躍動し，唐代の絵画技術のきわめて高い水準をしめしている。

懿徳太子の墓からは，それぞれ形の異った三彩騎馬狩猟俑と装飾具の華麗な三彩の大馬が発見されたが，これは三彩のなかの逸品である。

俑群は金と銀を塗り，色とりどりに彩色し，その装飾が精巧なことではかつてないものである。加彩塗金武人鎧馬俑群や墓道の両側に描かれた車や馬に乗った行列は，みな懿徳太子が出行するときの儀仗の光景をうつしだしたものである。儀仗隊の前方に望楼がそそり立っている。もっともこまやかな壁画は，幾人もの侍女を描いた墓室の壁画である。侍女のなかには，うちわをもつものや，はたきを手にするもの，杯をのせた盤を捧げるもの，如意（にょい）をもったものがいて，たがいに呼応しあっているさまがこまかに描写されている。

同じような題材は，永泰公主李仙蕙（中宗の七番目の娘）の墓室の壁画にもみられる。1972年，日本の考古学関係者が奈良橿原の高松塚でもこれに類似した侍女群の壁画を発見している。日本の古墓からの唐墓と関係のある資料の発見はこれだけではない。懿徳太子墓の線刻石槨の下部とよく似た墓門装飾は，日本の大阪の御嶺山の後期・古墳の棺台にもみられる。中日両国の文化交流の源が古く，その流れの長いことについては，両国の考古学の成果が，納得のゆく確証を再三もたらしてくれている。

北宋の定県

宋元時代の展示は，この展覧会の終りの部分である。展示品には漢唐の貴族官僚が所有したような豪華な器物は少ないが，しかし，かえって宋元時代の一部手工業の発展とゆたかになった都市生活の内容をしめしている。

河北省定県の二つの塔の台基の地下室で発見された多量の器物は，主として北宋のはじめ太平興国二年(977)から至道元年(995)まで，定州付近の軍隊と人民がいわゆる仏舎利に供え，あるいは施しを行ったりしたものである。これらの器物の主な部分は，当時焼成された定窯の白磁器である。器の底に「官」という字がかきこまれているものは当時の国営の窯で焼造したものであることをしめしている。こうした窯の製品が民間に現われたということは，研究に値いする問題である。

二つの塔台基はたがいに20年の開きをもっているが，そこから出土した定窯の磁器は北宋初期の定窯の工芸水準が急速に発展していることをしめしている。つまり，器形が多様化し，釉色の白さが増し，文様の装飾も日ましに複雑になっている。展示されている黄釉鸚鵡形水注や緑釉浄瓶も，定窯の製品だと考えている人があるが，それがまちがっていないとすれば，それは，北宋中期以後定窯がいろいろな色の釉の磁器を作ったそのはじめとみるべきであろう。

鶴壁窯

河南省の鶴壁窯は1954年に発見された北宋，金，元の期間の重要な民間の窯である。窯址の面積はおよそ27万平方メートルにのぼっている。文化層の堆積は，ここの最盛期が北宋の末から金までの時期であったことをしめしている。ここの主な製品は，これまでいわゆる磁州窯系とされていた白釉黒花の器で，器の形状が

大らかで素地が堅固であり，文様の清新さがよろこばれている。展示品の一つ，児童花鹿文盤の印模は上部に焼いた人の名前と記号の入ったマークが刻まれている。これは，小規模な生産が一定の程度にまで発展し，競争しあう情況のあらわれたことをしめすものである。

元の大都遺址

建国以来，首都の建設にともなって，元の大都の遺跡の考古学的調査が大規模にくりひろげられた。大都の範囲，宮殿区，居住地域，排水設備や川，用水路系統などはほとんど明らかになった。文化大革命の期間に，西直門から東北の安定門までの線上の，明の初めに建てられた北京城北壁の下にある元代の遺址を重点的に調査した。そこには寺院や大きな邸宅，一般の住宅，手工業の作業場があり，建築部材や各種磁器などが大量に出土した。それによると，磁器の使用が当時すでに普及しており，以前にはあまりみられなかった大型の罐，瓶，盤などかなり多く発見されており，これが元代磁器の造型の特徴の一つであることは明らかである。展示された白釉黒花鳳文大罐と鈞窯台つき双耳花瓶は，大型の磁器のなかでもかなり珍しいものである。后英房の遺址は三つの大きな中庭が東西に横に並んでおり，かなり完全な形で残されている。わたくしたちはこの復原図を作った。「元章」の題記を刻んだ風字石硯と瑪瑙の碁石が展示されているが，これもここから出土したものである。西直門の瓮城では元代の城門が完全な形で発見された。それは元の和義門の瓮城門で，元の大都の各城門につくられた瓮城は，元の支配集団が農民の烽起軍に抵抗しようとして築いたものである。遺跡はわたくしたちにつぎのことを教えている。つまり，この瓮城に当時としては最新の城門建築の技術である塼でアーチをつくる方法をとり入れたり，消火設備をとりつけたりしても，湧き起る農民の烽起の嵐をおしとどめることはできず，瓮城の工事が完成して10年もたたないうちに，元朝の封建支配がくずれ去ったのだということである。

友誼の促進を

今回展示した文物は，漢・唐を重点とし，漢以前は南方の楚の文化について考古学上新しく発見されたものを重点的にきわだたせた。隋唐の文物のなかでは，長安で出土した日本の5枚の「和同開珎」銀銭のうちの1枚から日本の正倉院所蔵の唐代文物に関連するものに及び，また，乾県の懿徳太子の墓の壁画のごとく日本の高松塚の侍女群壁画に関係があると考えられるものに及んでいるが，これらはみな中日両国の友好往来と文化交流が悠久の歴史をもっていることを十二分に物語っている。わたくしたちは，今回の展覧会を通じて中日両国の人民の間の文化交流と伝統的な友誼をさらにいっそう促進し，発展させることができるものと信じている。

中華人民共和国文物事業管理局局長

文革中の大発掘事業

宮川寅雄

私たちは，本年4月，中華人民共和国出土文物展に関する議定書に調印するためと，その招来の諸般の準備のために，招かれて訪中したのであるが，北京に入るとすぐ，歴史博物館に案内されて，そこに仮展示された日本開催展の出土文物をまのあたりにした。

文物はすでに，よく配慮され，周到に陳列されていた。国家文物管理事業局長の王冶秋氏から手渡された「列品目録」をみると，15の省と市と自治区にわたる236点の出土文物が，その他の参考品とともに，発掘，発見地別，年代順に整理されている。よく配慮されているというのは，最近のプロレタリア文化大革命中の出土文物を中心に，それ以前の発掘文物を加え，春秋時代から元代まで，日本の人民の希望を考慮して精撰されているということである。

歴史博物館の2階の数室の展示場に入ると，「中華人民共和国出土文物展覧」と大字額が掲げられ，それとならんで「前言」が掲示されていた。「前言」は，日本での出土文物展開催についての挨拶とも言うべきものである。それを下に訳載しておこう。

「中華民族の祖先は，長期にわたる勤労のなかで，絢爛(けんらん)たる古代文化を創造し，あまたの珍貴な歴史文物を遺した。新中国成立後，文物考古工作者と広汎な労農兵大衆は，中国共産党と人民政府の指導の下に，全国の重要な文化遺跡と古墓の調査と発掘をすすめ，大量の文物を出土し，歴史研究に重要な実物資料を提供した。

ここに展示したのは，安徽，湖北，湖南，雲南，広西，江蘇，河南，陝西，河北と北京などの，省，市，自治区，15処の遺跡と葬墓の出土文物の一部で，その大部分は，プロレタリア文化大革命開始以後の新発見にかかる。

中日両国は，海を隔てて相望む隣邦である。

両国人民の友好往来と文化交流は，二千年の悠久の歴史をもっている。われわれは，今回の展覧をつうじ，中日両国人民の伝統的友誼の新しい発展のために，有益な貢献をするものと信ずる。」

私は展示場を巡覧し終って，多くの文物に新しい関心をもった。もちろん，湖南省長沙の馬王堆一号墓の出土文物や江蘇省徐州の東漢墓発見の銀縷玉衣などの出陳は，いうまでもない。この二処の出土品の招来は，まったく，中国側の強い友情の結果である。しかし，その他の多数の列品も，これに劣らない重要な稀品をふくんでいた。たとえば，安徽省寿県の在銘の蔡侯銅器群，湖北省江陵望山一号墓の竹簡と伴出された竹簡の制作用器，雲南省晋寧の石寨山西漢墓出土のすばらしい造形の銅貯貝器，江蘇省南京象山の東晋墓出土の王羲之一族の葬墓の副葬品，陝西省西安地区の旧発掘の大明宮，興慶宮の出土文物と文革中出土の興化坊の金銀器などがある。それに加えて，昨年度，陝西省乾県新出の壁画墓二基の壁画摹本がある。これは，かつての永泰公主墓壁画にさらに加える初唐の大壁画群であって，中国側が，われわれの希望と期待とを，痛いほど察知していることを示すものと言えよう。

すでに周知のように，中国考古文物界は，1949年の解放によって，まったく面目を一新し，根本的な改革を行ったが，その成果は，1960年に至る発掘，発見の総括的簡報として「新中国の考古収穫」（中国科学院考古研究所編）が刊行されている。ついで，

1961年3月には，18条からなる「国務院関係文物保護管理暫定条例」が，新たに公布され，社会主義体制の下での文物保護制度が，充実，密着したのであった。

ついで，1966年，史上事例をみないプロレタリア文化大革命の時期に入り，中国の文物保護政策は，それまでよりも一層，強固で，広汎な保障を得たのであった。当時，想像したとは反対に，この革命期間中，民族歴史遺産の尊重は，より高揚し，発掘，調査の量は，より増大した。1971年夏には，故宮博物院の慈寧宮に，文化大革命期間中出土文物展が展示され，人民大衆に，歴史研究の資料として公開された。こうした措置は，歴史的文物は，すべて歴代の人民の創造の所産であり，人民は，そこから歴史の教訓を学びとり，古きものを今に用いるとする文化大革命の思想にもとづくものである。その意味から，本展観は，中国において，なおも継続中の文化大革命の成功の一記録ということができよう。

文化大革命中，中国の考古文物界には，なお，注目すべき改革が行われつつある。いまは，その一事例を紹介するに止めよう。それは，中国では，古文物の発掘，調査に，つねに労働者，農民，解放軍兵士が積極的に参加しているということである。たとえば，各省，市の博物館を訪ずれるものは，館の一隅に，かれらから文物工作者宛の多数の文物発見の報告や発掘参加の通信が掲示されているのを見るだろう。また，かれらは，出土文物に対して感想を寄せ，意見を述べているのを知ることができる。このように，大衆に依拠し，大衆に奉仕し，ともに文物保護に当っているという状況こそ，新中国の考古文物界の現在の特徴的な姿であるといっていいだろう。文物は私有されることがないし，文物発掘は妨害されることもない。文物の出土した遺跡は，完好に保存されるのが当然のことになっている。これらは，片鱗を紹介したに過ぎないが，全体を推測する指標でもある。

さて私は，一昨年，はじめて文化大革命期間出土文物展が，故宮博物院で公開されたとき，中国の民衆とともに，その第1日に参観することができたのだが，その折，郭沫若中国科学院長と王冶秋氏とは，陝西省の出土室の前で，長安興化坊から出土した銀銭・和同開珎をさして，日中の歴史的きずなについて話されたことを想起する。そして，今回の日本展にも，その一点が展示されていることを，特に指摘しておきたい。それに，今回の展観には，わが平城宮址の原型ともいうべき長安の大明宮，興慶宮からの出土文物が出陳されていることもあって，中国側の友誼の心の厚いのを，強く印象づけられるのである。したがって，今回，未曾有の中国出土文物展が招来されたということは，この展観が，単に，両国の学術交流といったことに止まるものでなく，より広く，両国人民間の友誼の里標となることを，中国も望み，日本も答えるというものでなければならぬだろう。

和光大学教授
日本中国文化交流協会常任理事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com